家政学分野の参照基準検討分科会（第5回）提出資料

2012-8-28　　工藤由貴子

家政学

１　家政学の定義

家政学は、「家庭生活を中心とした人間生活における人間と環境との相互作用について、人的・物的両面から、自然・社会・人文の諸科学を基盤として研究し、生活の向上とともに人類の福祉に貢献する実践的総合科学である。
（『家政学将来構想』日本家政学会将来構想特別委員会 1984 年）
本参照基準においても、この定義を踏襲する。

~~家政学は、それを必要とする国においてそれぞれの文化、歴史、生活実態に応じた定義をもつ。日本でも、慎重な協議を経て、上記のものが最終的定義とされている。~~

家政学が考察の対象とするのは、「人間」と「生活」であり、「生活」における「人間と環境との相互作用」である。ここでいう「生活」とは、人格をもった人間としての生活であり、生命の維持から生涯を通じた豊かさまでを含む。すなわち、「生存」「より豊かに生きること」「生涯を豊かに過ごすこと」を含んだ総合的な生きる営みである。

また、現代社会において、個人の生活のありようは多様であり、生活の単位は、血縁関係を基盤とする家族によって形成される、あるいは、夫婦の性別役割分業にのっとった~~厳密な意味（古典的な意味合い）での~~「家庭生活」であるとは限らない。しかしながら、家政学が考察の対象とするのは、人間がその周辺のモノ・こと・人との相互作用を繰り返しながら、最適で持続可能な生活実現に向かう生活の行為・マネジメントであり、その過程で形成される生活の基盤を重視する。個人の全体的な帰属が保障され、生きていく時間の継続性が保障される生活基盤の形成である。
ここでいう「最適で持続可能な生活」とは、人間の本質の完全な実現、個人の全面的発達が保障され、かつ、そのことが次世代をも含む社会全体の持続可能性の実現をも意味するような生活のありようをいう。
今後まずます多様性が増し、リスクが高まる社会においては、個人がそのまま直接社会にさらされるような状況が強まっていく。このような状況の中で、多様な個人にとっての最適で持続可能な生活が守られるためには、個人と社会の間に個人の帰属を保障する生活基盤をつくることが必要であり、それは衣食住を中心とした日常生活の積み重ね、生活資源の適切なマネジメントによって行われる。

「家庭生活を中心とした人間生活」としているのはこのような意味合いにおいてであり、生活基盤の形成とそこを拠点にして展開される人間の生活そのものを研究の対象としている。

家政学によって形成される生活基盤は、人間のプライバシィを守りつつも、隔離されているのではなく開放的であり、外に広がる様々なレベルの環境と相互に関係し合い、全体としてその人の生活空間を形成する。年齢や身心状況に左右されない参加の機会かあり、安全・防災の保障も満たされている。その外側には社会保障セーフティネット、豊かな社会資本、特有の自然　気候　文化　歴史　がある。このように、家政学の関心は、生活の基盤を中心として、その形成に必要なより広い生活環境全般へと拡大する。

２　家政学小史

（１）ホーム・エコノミクスの歴史

ホーム・エコノミクスの起源は古く、ギリシア時代にさかのぼる。
古代ギリシアの哲学者たちは, 人間生活の最も基本的な場として, 家をめぐる諸問題を考察した。家政学(オイコノミカ oikonomika)は、ギリシア語で家を指すオイコス(oikos)と法や秩序を意味するノモス(nomos)に由来し、家の秩序をもたらすための家政術を探求する学として位置づけられた。
ソクラテスの弟子クセノフォン(前 430～354)が著した『オイコノミコス(家政を司る人)』では、オイコスは農耕を営む家を指すと同時に、生活に有用な財産の総体という意味で使われている。続くアリストテレス(前 384～322)『オイコノミカ(家政学)』では、家における財政術, 家政の原理や掟, 人間相互の倫理的関係などが論じられている。そこでは, オイコスがポリスに先立つ最初の共同体として位置づけられている。

近代家政学の成立は、1899 年～1908 年に開催されたアメリカのレークプラシッド会議、それに続くアメリカ家政学会の設立を機とされる。アメリカ家政学会の第 1 回会議において、Home　Economics：家政学という学問名称が定められた。

（２）日本の家政学小史（新しく追加）

日本の家政学は、家事技術中心の女子教育近代史を経て、第二次世界大戦後の女性への大学門戸開放という転換期に、大学教育・研究分野としてその一歩を踏み出した。
この点において、家庭生活改善に向けて日常生活に科学を運用する分野として家政学が発足し、その成果を教育へと応用・還元させてきた欧米諸国の家政学とは異なる歴史をもつ。

明治 5 年学制公布によって全国に学校が創設され、女子に対して家庭生活に関する教科目が設けられた、それが、学校教育機関による家政教育のはじまりとされる。この時期、新しい時代にふさわしい家政教育の視野と知識・技術は欧米の家政書に求められた。
そのことによって、それまでの日本社会にあった、一家の治世を意味し、一族を束ね、土地家産を管理し、家人の労働を奨励する任務を包括するものとしての「家政」概念は、当時の欧米先進諸国の市民社会によって育まれた女性観、家庭観の影響を強く受けることになり、女性、特に、主婦がかかわる衣・食・住・育児・家計などの実務や実技といった家事運営の任務や技術の意味合いを強くしていった。

明治 22 年の高等女学校令公布によって女子中等教育が確立され、その中で、「家事科」「裁縫科」が定着した。次いで、明治 36 年の専門学校令によって、家政学を教科目にする専門学校の創設が認められ、家政教育は良妻賢母主義の理念の普及に大きな役割を果たすようになった。
その後、イギリス、アメリカを中心に海外の科学としての家政学の導入が試みられた。総じて、戦前には、学問としての家政学の成立はその萌芽に留まり、家政学以前の状態が続いた。

1947 年の教育基本法、学校教育法の公布、続く 1948 年、旧制専門学校の新制大学への昇格によって、日本初の新制女子大学が設置された。そこで家政学部が創設されたことを機に、「家政学」が正式な学問名称として使用された。
その後、次々と女子大学に家政学部が設置された。また、当初変則的に 2 年制大学として発足しその後制度として正則化された短期大学の多くは女子短期大学としてつくられ、その大部分が家政学専攻の課程をもうけ、家政学専攻の卒業生を大量に社会に送り出した。

以上のように、日本においては、教育としての家政科の成立普及が先行し、女子教育の中心的役割を果たしてきた家政科に、学問的価値・科学的客観性を与えようとする家政学の成立がそれに続いたという、その成り立ちにおける特徴をもっている。
生活の営みに必要な家事・技術の習得という側面と、それを一般化し科学として研究する側面、その両者の関係の整序化はいまだ達成されたとはいえず、体系化を目指す長い道のりはまだ続いている。

3　家政学に固有の特性

1）家政学に固有の視点

家政学に固有の視点は、トータルな人間と生活への関心であり、人間の視点で生活全体を俯瞰する考察である。継続性、定着性といった生命の論理及び家族の論理と、生産性、効率性、協働性といった社会の論理から編み出される人の生活を対象とする~~。家政学の特性は、他の科学にはみられないものである。~~

家政学は、生活の質の向上、人類の福祉に資することを目的としており、~~た実践科学であり~~、事象の客観記述の記載、因果関係の立証といった理論科学の目的のみならず、「生活の質の向上」とは、何をもって向上というのか、それは何故かという客観的解明が必要となる。そのためには統合の要である「家政観」を科学の基礎として共有する必要がある。
時代の変化、社会の変化に対応しつつも、人間としての生活の普遍的・本質的な価値をその核に据えて、研究・活動を展開することが求められる。
家政学のもつ生活の価値としては、安心、安全、健康、快適さ等に加えて、弱者への配慮、ジェンダー価値も含まれる。また、今日のようにダイナミックに変化し、リスクの多い社会における生活の価値実現においては、特に、柔軟性、復元力といった力の重要性が増している。

家政学は、生活の主体である人間が生活手段や資源を活用して、生活価値・生活欲求を実現させていく主体的な過程を重視し、「習慣化され受動的になりがちな生活」の顕在的・潜在的問題点を指摘し、どうすれば「主体的で創造的な生活」を実現できるかを追求する点に特徴がある。

~~家政学の専門家が備えるべき不可欠な要件としては、以下の３点がある。~~
~~・個人、家族の日常生活における基本的なニーズ、及び関心事に焦点を当てていること。そして、それらの重要性を共同体、社会、グローバルな視点で捉え、常に変化し、新たな課題が生起している現代社会において、個人・コミュニティのウェル・ビーイングが充実するよう注力していること。~~
~~・個別学問領域を超えた視点での調査研究や関連の理論的パラダイムを通じて、多様な分野の知識・プロセス・技術を統合していること。~~
~~・個人・家族・コミュニティのウェル・ビーイングを促進し擁護するための、批判的・変革的・開放的な行動を起こすことができること。~~

２）「技術」の位置づけ（新しく追加）

女子向け教育の家事科家政科が母胎となって女子大学の家政学部が発足したという、
学問としての家政学の成立のいきさつは、家政学小史に述べた通りである。
家政学発足の後も、戦前の家事・技術の習得が重きをなしていた家事科や家政科の教科が

大すじにおいて受け継がれて、それが拡大一般化された形で戦後の家政学部が形成されてきたという現実の流れがある。
特に、短期大学を中心に、教科内容に料理・裁縫の技術の習得がかなり重きをなしているところも多く、家政＝日常生活上の技術習得という一般のイメージにつながる風潮が生み出されててきたことも確かである。

しかしながら、家政学の課題は現実の家庭生活からもたらされるものである。生活を取り巻く社会の進歩や多くの学問分野の成果を生活の中にどのように取り込んでいくかという実践的課題について総合的に判断し、経済発展を基盤に考えられる産業の変化や、技術の進歩による成果を適切に生活に組み込みながら、生活の向上に向けて行われる実践的な問題解決の研究が家政学であり、家政学における生活技術の重要性は明白である。

産業化の恩恵に与り、生活の物資的向上が基本的課題であった家政学生成期においては、生活の豊かさの実現のためにいかに新しい技術を取り入れ、使いこなすかということが重要な課題であった。その後、大衆消費社会の定着以降　それまでのように不足する物をどのように補って合理的に生活の質の向上を図るかといった問題ではなく、どのように自己の生活を規定し、選んでいくかが問題になる。物質的豊かさが必ずしも生活の豊かさを意味しないこと、経済社会優位の時代変化が生活する人間の主体性を育んでこなかったことが明らかになる中で、家政学においては、新しい技術の進歩によって次々に生み出される技術をどう解釈し、いかに選択して社会・経済との相互関係を整えるかということが課題となる。
人間が各ライフステージにおいて、またその生涯においてより主体的に自律的に生きるという目標を共有する家政学の各専門諸領域の科学は、それぞれの領域における最先端の技術テクノロジーを研究し、実践することを、その目標を実現するために協力的に行うことによって家政学の統合力が強化される。

３）方法論にみられる独自性~~多様なアプローチ~~

「家政学は、家庭生活を中心とした人間生活における人間と環境との相互作用について、人的・物的両面から、自然・社会・人文の諸科学を基盤として研究し、生活の向上とともに人類の福祉に貢献する実践的総合科学である。」との定義にみられるように、家政学の研究方法は、目的、対象と並んで家政学の学問体系の中で重要な位置を占めている。
一つの要素に関する細分化され、深化された学問成果だけでは家政学の独自の研究たりえない。分化し精緻化された成果や知見を家政学としての独自の視点で統合していくことが求められる。

家政学を特徴づける方法論の一つに「自然科学的方法と社会科学的方法の統一」がある。
家政学が対象とする生活そのもの、および、それをとりまく環境は、人間を含む自然と人間がつくる社会と両者から成り立っているということに拠り、家政学の研究方法は必然的に自然科学と社会科学の統一となる。
自然と社会は、家政学にとってはその対象の二つの切り離された部分ではなく、元来統一されたものの二つの側面ということである。たとえば、食生活、衣生活、住生活、生活経済のどれ一つをとっても、自然科学と社会科学の協同作業なしには問題自体の解明が不可能である。
この二つの領域の研究を人の視点によって統一することによって成り立ち、組み立てられた科学として、家政学は、人がよりよく生きるという中核的理念に収斂される研究成果を各領域科学が展開するという方向性において統合される。

これに関連して、二つ目には「学際的方法」があげられる。
家政学は、その目的の達成のために複数の科学・学問を有効に用いる。
家庭生活を中心にした人と人、人と物、および家庭生活とそれをとりまく環境とのかかわりを明らかにするという家政学は、トータルなシステムの中で家庭生活をとらえ、エコロジカルな視点で人、モノ、こと(家庭生活、コミュニティの生活)を研究し、実践的課題に応える。
したがって、その対象は、多面的、総合的に営まれている人間の生活を研究対象とし、同時に地域コミュニティ、全体社会、地球規模での国際的動向と不可分の関係におかれ運営されている生活である。このことから、多種多様な学問分野と関連し、学際的、越学問的(transdisciplinary)な研究による知見を統合する。

~~隣接諸学問分野の知見の結合は家政学にとって極めて重要である。~~
~~家政学に係わる科学分野は、食物学、被服学、住居学、児童学、家庭経営学、家政教育学の 6 領域」(1973 年「家政学将来計画委員会報告」)とされていたが、それぞれの領域は、更に、経済学、経営学、農学、社会学、法学、心理学、医学、教育学、体育、工学、歴史学、人類学、民俗学などはすべて家政学の隣接領域であり、こうした隣接領域を中心とする様々な学問分野から知見を取り入れることは家政学の強みであり、これにより、ある課題に対する家政学の説明能力が拡大、発展していく。~~
~~このような学際性は、最適で持続可能な生活を達成するという目的とあいまって、家政学が政治的、社会的、文化的、生態学的、経済的、技術的なシステムに関わり、変革を促していくことで、社会におけるあらゆる側面に影響を与える可能性をもつことを示唆している。~~

家政学の研究は、食物、被服、児童などの個別領域内部に限定されるテーマで行われる場

合と、家政学の多領域の研究者による共同によってでなければ解明できないテーマ研究とがある。後者の場合にはおのずと隣接諸学問との協働による学際的な研究方法が用いられるが、家政学の場合、個別領域の一人の研究者の限定されたテーマでの場合も、必ず全体の中にその部分を置いて全体の中に位置づけるという方法、全体的・総合的方法がとられることが重要である。

三つ目には「実践的方法」があげられる。
実践的研究方法は、環境変革を意図する家政学の研究方法として重要である。このアプローチによって家政学の研究は~~理論から~~現実に貢献しうる生きた理論となり、その結果をもって現実を改造し変革する機能を発揮することになる。
家政学は、それぞれの基礎学問に立脚して、それぞれの学問の特徴による発展方向をもつが、その成果が社会的実践課題の解明へと結びついていくことによって家政学として統合される。
その意味で、家政学に関する教育が肝要であり、家政教育・家庭科教育などがあげられる。

４）家政学の役割

人間はその周辺にある環境・物・人と関わりながら生活を営んでいる。より質の高い生活を営むためにどのように生活を選び組み立てるかは、人間が生きる上での最も大切な意志決定の一つである。社会は、人間生活の集合体であり、個々の生活がその社会の基盤であることから、生活をいかに営んでいくかは社会の質を左右する大きな要因である。
以上のことから、家政学の研究・活動は、大きく、研究、日常生活上での実践、教育、社会的領域の４領域にわたる。

・学問領域として：専門職や社会のために~~新しい学者~~研究者を教育し、研究を行い、新しい知識や考え方を創造すること。
・日常生活分野として：人間の成長の可能性を開拓し、基本的欲求の充足を満たすための世帯、家族、コミュニティをつくること。
・カリキュラムとして：生徒が自らの生活の中で使える自分の資源や能力を発見し、更に開発できるように、彼（女）らの将来の選択や生活能力を準備すること。
・政策に影響や発展をもたらす社会的領域として：個人、家族、コミュニティをエンパワーし、福祉を向上させ、快適な生活の実現、及び持続可能な将来を創り出すことを促進するような政策が形成されることに寄与する。
上記４領域にわたる活動を行い、家政学は常に進化し、その実践方法も常に新しくされる。